

# 智恩寺文殊堂

理事 大沼芳則

## はじめに

丹後の景勝地で知られる天橋立の文殊堂は、宮津市文珠にあって四季を通じて参詣者にぎわいを見せている。智恩寺では文殊堂が経年の破損による改修の時期を迎えたことから、修理計画を進めていたが、平成9年4月から同11年3月にかけて半解体修理を行っている。工事は2期に分け、第1期として軒廻りから上部を平成10年3月に、軸部と縁廻り床部を11年3月までに改修した。工事にあたり設計監理を財団法人建築研究協会が委託を受けたので、工事中の諸記録と建物の調査を日本建築研究室が担当した。

## 建物の概要

天橋山智恩寺は延喜年中の開創と伝えられる。嘉暦年間より歴代の在任職名が記録に残っている。初代嵩山禅師は中国への留学僧で、禅宗を伝えて新しい文殊信仰をもたらし、智恩寺の復興に新風を注いだことがうかがえる。それまで密教寺院であった智恩寺がこの時禅寺に改宗されたことは、今回の改修で発見された来迎壁の全面が密教系の両界曼陀羅であるのに対して、裏面が釈迦三尊十六羅漢図であることからみて、南北朝後期の改宗は容易に推定される場所である。しかしその後は資料に乏しく、室町時代に第八代の道徳寿桃が、相国寺の彦龍周興に「九世戸智恩寺幹縁疏」の執筆を依頼し、復興を勧進した記録がある。ついで第九代智海覺甫は真言僧として密教系の復興に勤め、丹後守護代の延永修理進春信を大壇那として多宝塔を建立している。

丹後地方は南北朝より室町時代をへて戦国時代まで一色家が国主の座についていたが、天正年間に信長の命により細川氏が平定に入り、慶長年間関ヶ原の功績により豊前に去るまで宮津に在住する。元和八年に京極高広が宮津に入り、京極氏は寛永年間に妙心寺の心燈照禅師を智恩寺に招いて中興の開山とし、以来臨濟宗となり現任職まで二十世を数える。

寺域は名勝天橋立の南端にあって阿蘇海を望む景勝の地にある。境内には重要文化財の多宝塔（明応九年、1600）をはじめ宮津市指定の有形文化財の山門（重層楼門形式、明和四年、1767）があり、本堂は禅宗様の六間取大広間を持つ方丈形式で（寛政十一年、1799）の再建である。また小規模ではあるが、庫裏の前面に暁雲閣という小門があり、（享保七年、1722）大工富田庸隆の作として優美な姿を松影に浮かべている。さらに庫裏、無相堂、土藏など江戸時代後期の建物があり、庫裏は先年修理を終っている。

文殊堂は境内の中心に位置し、本尊の木造文殊菩薩脇士善財童子優闍王像は鎌倉期の作

として明治三十五年(1902)に有形文化財の指定を受けている。御堂の前面二間通りの外陣と入側、背面一間通りを吹き放ちとする。内陣は四周を開放的な空間に面した三間四方の平面を持ち、中心に四天柱に囲まれた内々陣を置く。建物の前面は三間向拝を持つ縄付きで、屋根は銅板葺の宝形造である。内陣の四天柱と折上格天井は中世の遺構を残しているが、その他建物の主体は明暦三年(1657)の再建であることが、今回の改修工事で屋根の宝珠銘から明らかとなった。文殊堂の明暦改修時の棟札によれば、四天柱は古くから伝わる元の建物の部材として全く腐朽が見えないので、これを保存することが記載されている。また来迎壁の周囲の框や、四天柱には数多くの墨書や釘書が残されている。今回の改修時に行った調査でその多くが参籠の記録であり、文永七年(1270)、正和三年(1314)、元応二年(1320)といった鎌倉時代の墨書から南北朝時代をへて室町時代までの書き付けが発見されている。今後の調査によってその内容を解明することが期待されるが、四天柱を中心とした内陣の折上小組格天井は、鎌倉時代に遡ることがわかっている。文殊堂は明暦年間に現状の姿に改築されたが、本尊を中心とした現在の内陣を主体とする前身建物が存在したことを明確に示している。これを裏付ける資料として、雪舟の天橋立景観図があげられる。この図には智恩寺を中心とした横の広がりをもつ地形の正確な実景描写が、画中に記された地名によってそれぞれの位置関係を確認することができる。この図に文殊堂はその北側面が描かれているが、三間重層に一間の裳階を付けた五間堂である。



天橋立図の一部 雪舟筆 京都国立博物館 紙本墨画

屋根は檜皮葺か柿葺で、向拝はなく、現状によく似た宝珠露盤を頂く宝形造となっている。他に智恩寺境内には明応九年に着工され翌年完成された多宝塔があり、永正四年(1507)焼失した成相寺の伽藍が描かれていることから、雪舟晩年の作とされる。文殊堂は以来150年後の明暦の改修までこの姿であったものと推定される。

他に文殊堂の姿を絵画に求めると、天橋立図として屏風絵に境内が描かれているものが数多く残されている。その中で最も注目されるのは室町時代の六曲屏風で、智恩寺境内を南から描写した図である。この図には山門をへだてて五間堂の宝形造り裳階付きの文殊堂が見える。紙本着色で屋根は檜皮葺に見えるが、雪舟の図に近い姿である。多宝塔の一部があり、文録二年(1593)に興正寺から移されたとされる湯舟が見えることから、明暦改修以前の文殊堂の形態をよく示している。また巖島、天橋立図として江戸時代の作とされる六曲屏風(サントリー美術館蔵)があり、これも南からの描写であるが各建物が詳細に描かれている。この図においても文殊堂は宝形造りで裳階があり、向拝の存在は判然としない。多宝塔と文殊堂の間に入母屋造りの拝殿のような建物が見えるが、存在しない建物である。この他に現状に近い智恩寺の境内を描いた江戸時代の作品はいくつも存在する。その中で境内を正確に写したのものとして、松翁齊作の一卷があり、この絵には裳階がなく向拝もはっきり存在する。なお島田雅喬作と横山華山作の屏風絵は、当時の境内を忠実に観察している。特に注目するのは、文殊堂の屋根が数少ない照り起りの姿を持ち、はっきり隅棟の曲線を描き出している。

智恩寺には本堂の残存古材として幅24cm長さ69cmの板が伝えられているが、一部に焼損がみられる。表に勾狭間の左端が残り裏に書き付けがあって、覺甫和尚の時本堂仏壇から出火し消火したとある。覺甫和尚は先に述べた通り多宝塔建立時の在住である。また今回の改修工事中に小屋裏から幅1098mm高さ1348mmの火燈窓枠が発見されている。黒漆面朱塗りで脇仏壇のものではないかと推定しているが、形もよく檜材で元の文殊堂の古材であるとみられる。丹後地方は永正の戦火により多くの寺院が焼失している。天正の戦乱を経て一色氏に代って細川氏や京極氏が宮津地方を支配するに至り、智恩寺は菩提寺としてその庇護を受けて諸堂の復興修理が行われている。明暦三年以後の修理記録は棟札が残っているので、文殊堂が八回の修理を受けて今日に至っていることがわかる。

### 明暦三年(1657)の改築

萬治二年(1659)の棟札には、表に現住南宗无智の長文を掲げている。記述によれば明暦元年(1655)の春から用材を集め、後西天皇の御下賜金や京極高國の援助を得て、本格的な大改築を行ったことがわかる。特に内陣の四天柱は神代草創の本柱で腐朽したことがなく、柱礎石も昔から変わっていないものだと記している。従って内陣の三間四方は格天

井も古材を再利用しているから、その柱筋もこの天井の寸法に合わせて天井肘木の位置を定めている。なお側廻りの一間通りも元の礎石を残したとすると、この時の改築は基本的に元の規模を守り、増加する参詣者のために必要な外陣と向拝を補足したものと考えられる。

内陣の天井は折上格天井であるから、新調する四周の天井受け肘木の出入り寸法は、旧天井端部の支輪下格縁に正確に合わせる必要がある。この辺りの調整は見事な納まりをみせているが、一方の四天柱側は、柱頭部外廻りに持ち送り式の廻縁を取り付けて処理している。持ち送りは古材を削り出して寸法合わせを行ったもので、頭貫は古材であるが、拳鼻は新調し、柱上部には粽をつけるなどの模様替えを施している。

四天柱内の内々陣折上天井は、旧天井長押から上部を元のまま残している。この天井上には切妻の小さい小屋が残っているが、その母屋材や束などは、古材を再利用している。小屋の屋根板は手割りの長板葺であり、旧状を残す貴重な資料である。改築に際して内陣を残すにあたり、特にこの付近は覆いの養生も兼ねて残したことが考えられる。この時の改築工事は以上の他は、全体を新しく建て替えているが、縁廻りや野地、軒先などに後補材が見えるだけで、建物全般にわたり現在まで当時の部材をよく残している。屋根の葺き替えは以後8回を数えるが、宝珠露盤は銅板製でこの改築時のものが残り、銘が刻まれていた。(明暦三年六月二十五日 文殊堂上葺 国主四侍従源朝臣高国 銘大道打是 山城国平安城之住 飾屋長兵衛寿員造之)

### 享保六年(1721)の改修

明暦三年(1657)に改築を行っているので、およそ60年を経過して、屋根の葺き替えは勿論小修理の必要性を生じ始めていた時期である。この時の棟札は明暦の改修時のものに倣ったもので、一回り大きいのが、表に住持比丘禅寂の長文が同形式で記述されている。前代より残された四天柱が腐朽したので、根継を施し、須弥壇と宮殿を新調したことがあり、大工富田河内の一族が工事に参加したことがわかる。宮津城主青山大善が勧進元となり、仏工、漆工、箔押、金具師まで名前をとどめている。内々陣は雨漏れの被害が起こり、厨子から須弥壇まで新調するに及び、その組上げには困難な作業が伴ったものと推測される。旧天井を取り外すことなく、狭い範囲の工作によったので、大型の厨子を納めるために、内法貫や内法長押は背面側を残して前の三方を撤去し、その上方も天井受けの長押以外は取り替えている。さらに床組の内々陣部分は切り取って、床束から新しく組み直している。背面の内法長押と来迎壁は元の状態が残り、腰下の元の仏壇下出入口は古材が残されている。従って元から仏壇があったことは間違いないが、四天柱は仏壇の高さで下方が根継を受けていて、床上でとまり禅宗様の礎盤を入れている。四天柱は側面が開放で、正面側の相対する内側面に板溝があり、埋木されているが、その他の柱面には溝がないことから、

この時までの内々陣は本尊仏がいかに安置されていたか判然としない。

この時期には東北に隣接する暁雲閣が建立され、大工富田庸隆他の名が残されている。

### 宝暦以後の改修

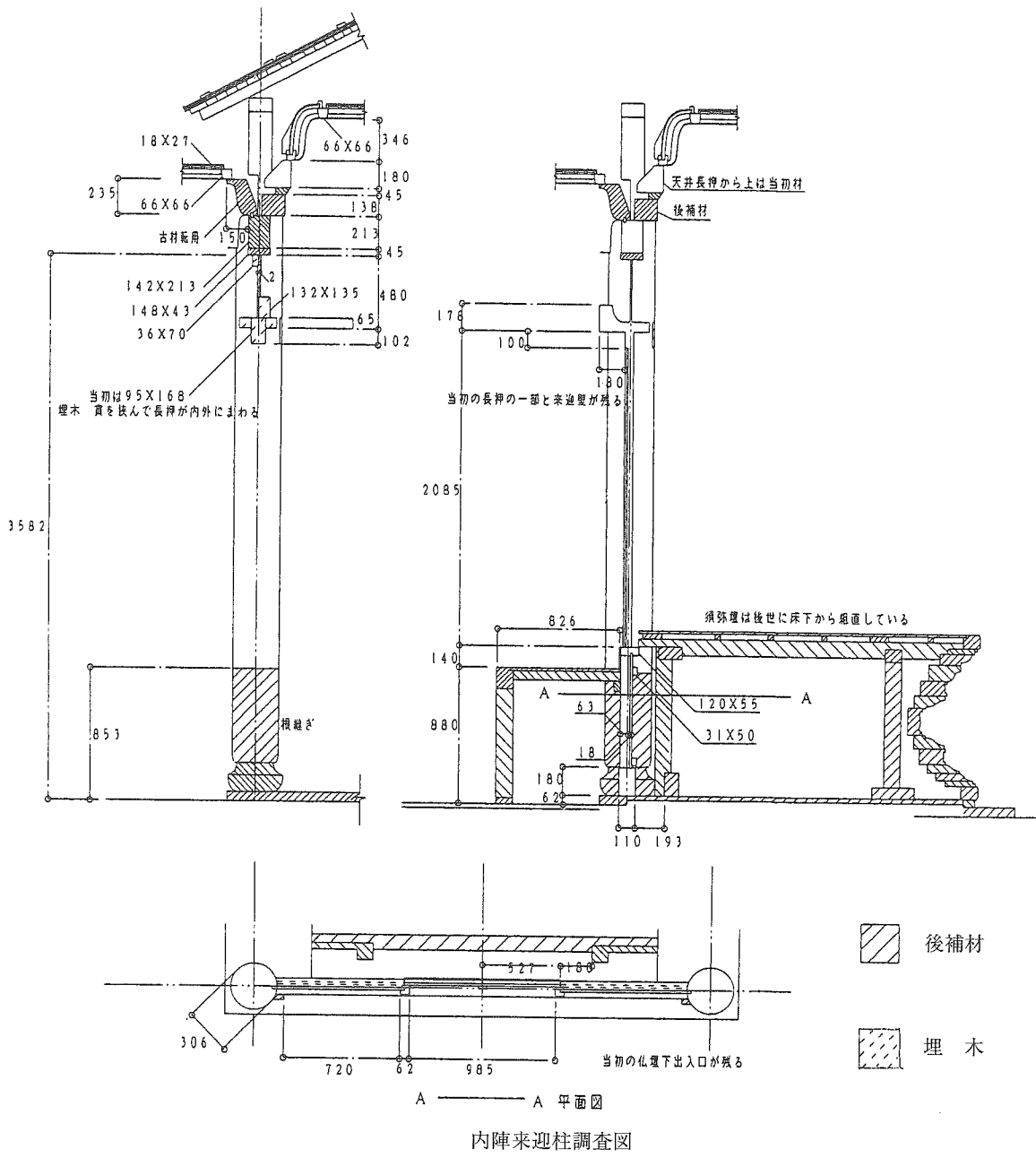
宝暦十三年（1763）は前の修理より41年を経過した時点であり、屋根の葺き替えとみられる。御桜町天皇より御下賜金があり、内陣後方の脇仏壇はこの時付加されている。ついで寛政八年（1796）は、主に屋根の葺き替えである。

天保四年（1833）には、棟札に大工富田清右衛門、木挽孫治良とあり、天保七年までかかっているから、単なる屋根替だけでなく、修理が行われたとみられるが、縁廻りの改修ではないかと推測する。この時以前の縁廻りの一部が東北隅の渡り廊下境に残っていた。内外陣境地長押の正面側等もこの時の修理で取り替えられている。また記録には与力檜皮大工藤原流棟梁橋本善とあり、屋根は檜皮葺としている。今回来迎壁の背面側から発見された釈迦説法図とみられる仏画の前面を覆っていた鳥の子紙の下貼りに使われていた版木刷りの紙片に「来ル申三月六日ヨリ十五日云 文殊堂上葺供養回向袋 文殊 智恩寺」とあり、この申歳にあたるのは天保七年（1836）が丙申歳であることがわかった。向拝南隅の裏甲上端からこの時の墨書が発見された。なお来迎壁北側の小仏壇は、この改修時に付加されたものとみられる。明治七年（1874）には屋根葺替杉板とあり、杉板の値段が1束200文などの記載がある。明治四十年（1907）には杉板葺として境内模様替としている。ついで大正十三年（1924）には、願主文殊浩然名で本堂屋根替諸堂修繕募縁趣意書が残っている。それには「政府ノ指令ヲ仰ケリ茲ニ其設計ニ順シ先ツ本堂ヲ檜皮ニ改メ幾箇ノ新築ヲ初メ諸堂ニ修築ヲ加ヘ」とある。昭和三十年には屋根を始めて銅板葺に改めている。4月11日着工5月23日竣工とあり、今回の工事前の屋根銅板葺である。解体中に旧柿葺の一部が発見された。

### 内陣の調査

#### 天 井

入り側と外陣、背面は鏡天井で、天井肘木上に幅広板を張る明暦改修時のものであった。内陣天井は折上小組格天井で、四天柱の内側は一段高い折上小組格天井である。この天井は前身建物の遺構を残し、四天柱と来迎壁とともに貴重な旧様式を伝えている。各部材は黒ずんでいるが総て保存状態がよく、一部仕口の緩みは生じていたが、折上小組と天井板を丁寧に取外し、旧手割板の天井板を極力再用して復旧した。図に示すとおり四天柱内側の天井長押は元のままであり、全く手つかずの状態である。内陣天井は部材寸法は同じものであるが、受け材の外廻り天井肘木は明暦材である。また内側の受け材である板支輪は古材を使っているが、曲線部分の削り加工は後補であった。



明暦改修時に旧天井を再用して、その周囲に建物を新築することは大変難しいことであり、微妙な寸法の調整が必要であったとみられる。四天柱は内側の状態からみて、上方に延びていたことが推定される。元々文殊堂は密教系の本堂であったものとする、改修に際して、禅宗様式を採用する必要が生じたものと考えられるが、元の四天柱は外廻りに内側と同様の天井長押を廻していたとみられる。四天柱は改修時に柱上方に粽を付け、拳鼻

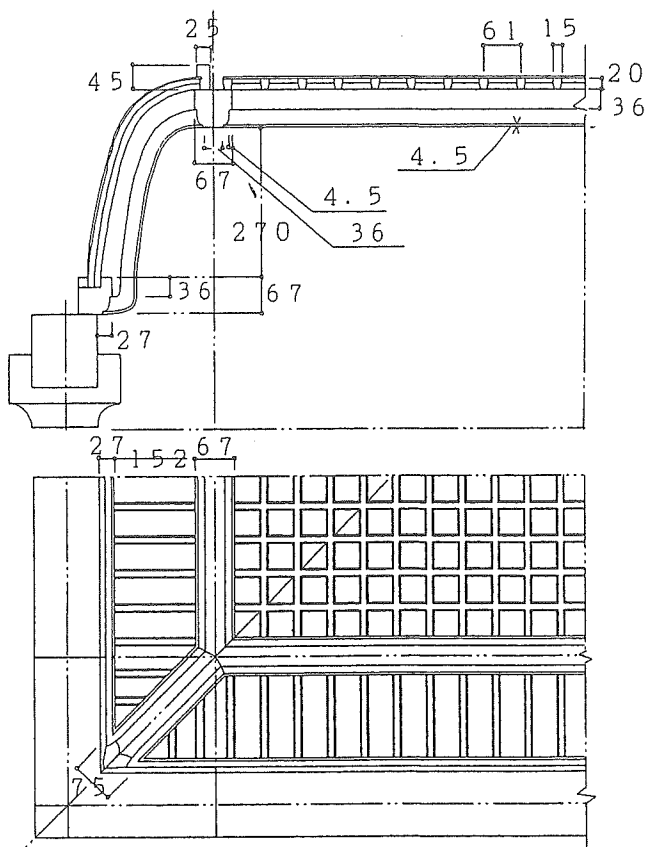
を入れている。頭貫は本来柱頭部を貫通するものであるが、柱間に納め、拳鼻は蟻掛に取り付けられている。さらに旧天井長押を板支輪に削り直し、頭貫上端に短柄を植えて取り付けていた。

#### 四天柱 来迎壁

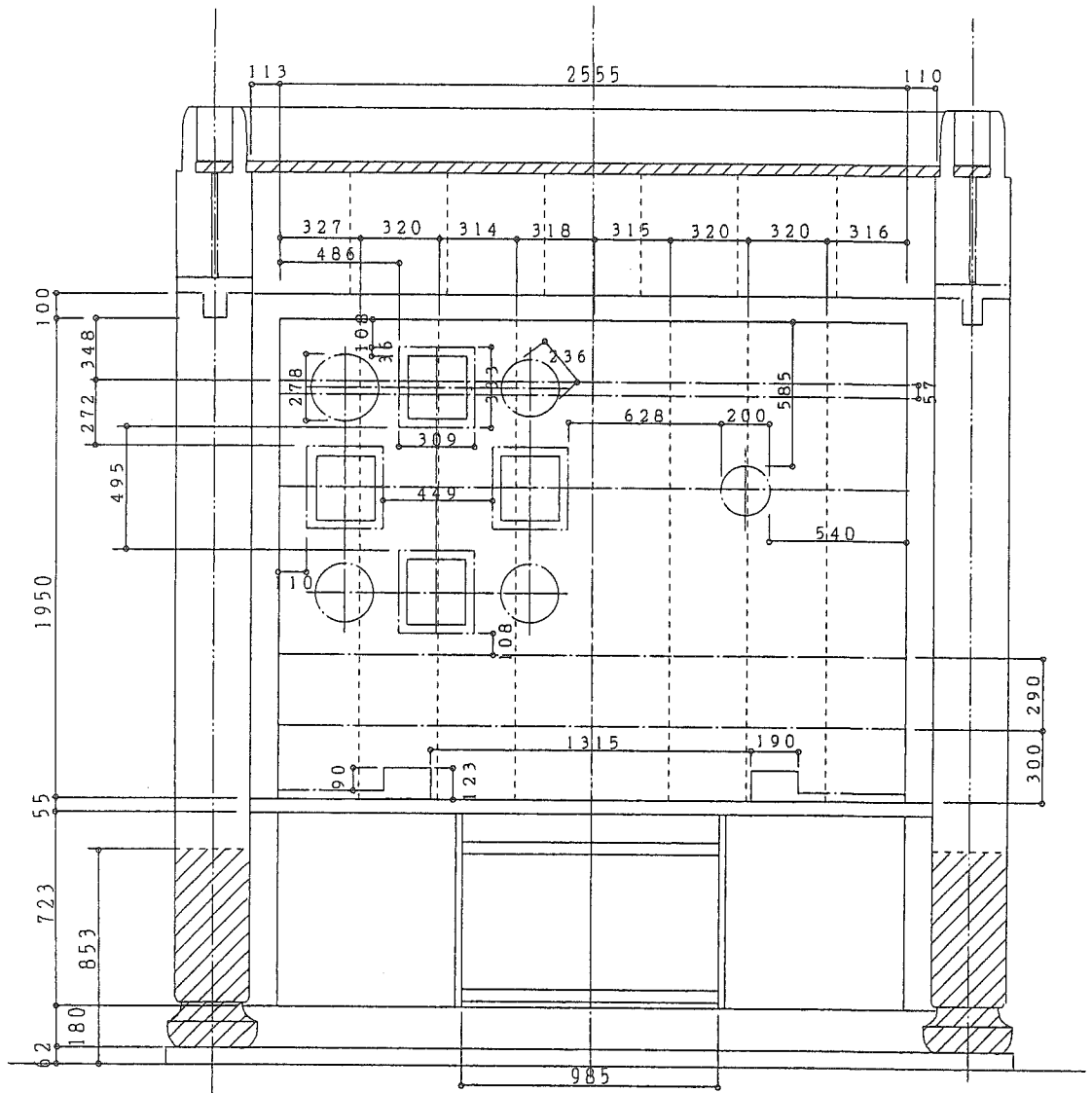
四天柱は享保に須弥壇を新調した際に床組から造り直しており、根継を受けている。四天柱は根本が腐り補修したことがこの時の棟札に記述がある。根継は床上853mmのところから下を継いでいるが、床上でとまり禅宗様の礎盤を柱根に用いている。


来迎壁は四天柱の背面側の長押下に框付きの豎板が入っている。柱とともに前身建物の遺構であるが、正面側は宮殿の陰で詳細は不明であった。裏側は一面に和紙が貼られていて今回の改修まで目に触れることはなかった。裏側の和紙をはがして見ると仏画が板に直接描かれていた。絵は和紙の糊によって剥落部分が全面に渡っており、上貼りの和紙には「来ル申三月六日ヨリ十五日迄文殊堂上尊供養回向袋」とあり、天保七年の屋根改修時に使われたものであった。

四天柱の正面と側面は現在頭貫から下を開放とするが、挿図に示す通り飛貫と内法長押が廻った痕跡があり、飛貫から上は壁板の溝がある。なお正面側の四天柱の相対する内側には板溝がある。背面通りの来迎壁の下には両開きの小さな出入口があって、それ等の構えは既存の須弥壇に使われているが、旧建物のものであり、前身建物においても須弥壇が大体同じ高さに存在したことがわかる。来迎壁の正面側は今回の改修工事が終了に近付いた平成十年末に宮殿を修理することになり、全面が開放された。挿図に示す通り剥落が進んでいたが、図柄からみて両界曼陀羅図ではないかとみられている。このような例としては、三千



内陣天井詳細図

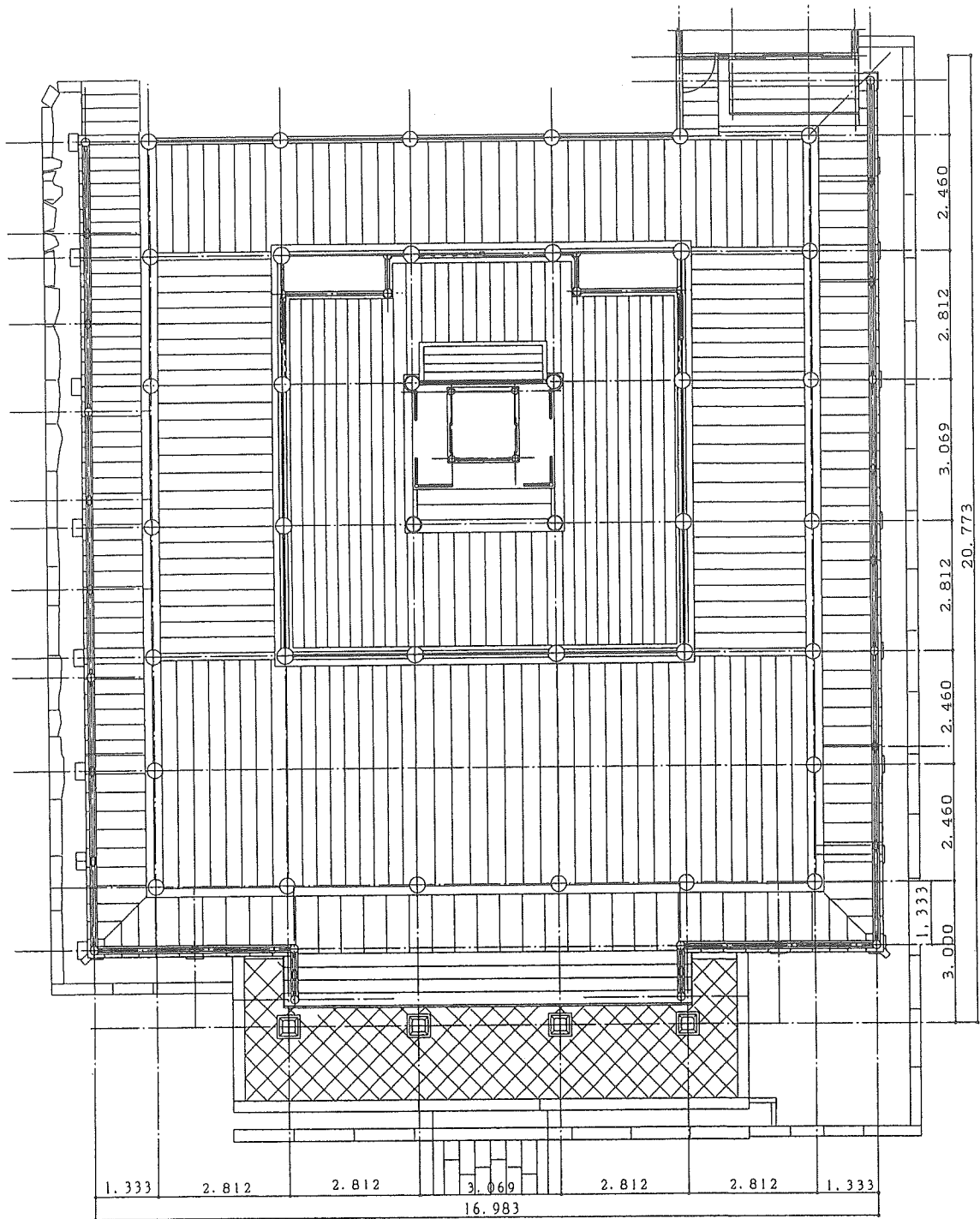


痕跡 ————— 材料の継目 - - - - - 後補材   
 来迎壁前面調査図（左半分に金剛界九会曼陀羅、右半分に胎藏界曼陀羅）

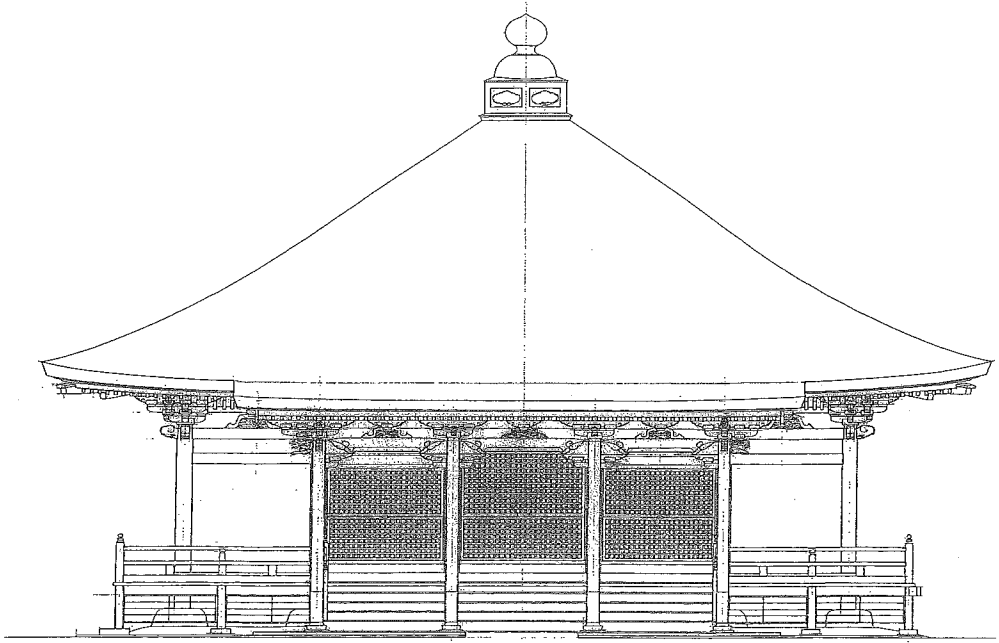
院本堂がある。この本堂は天台宗の常行三昧堂であったと伝えられる平安後期の建物であり、文殊堂の前身建物も元は密教系に属していたことが明らかである。

来迎壁背面の壁画については、「釈迦三尊十六羅漢図」と推定され、浜田隆氏に調査を依頼したところ、「剥落が著しく総てを見究めたいが、確認できる範囲だけでも、その図像構成の独自性や細部の自在な表現などは十分評価に値し、南北朝時代に遡る作である可能性とあわせて、この種の禅宗系絵画の早期の貴重な一本と認められる」との所見を得てい

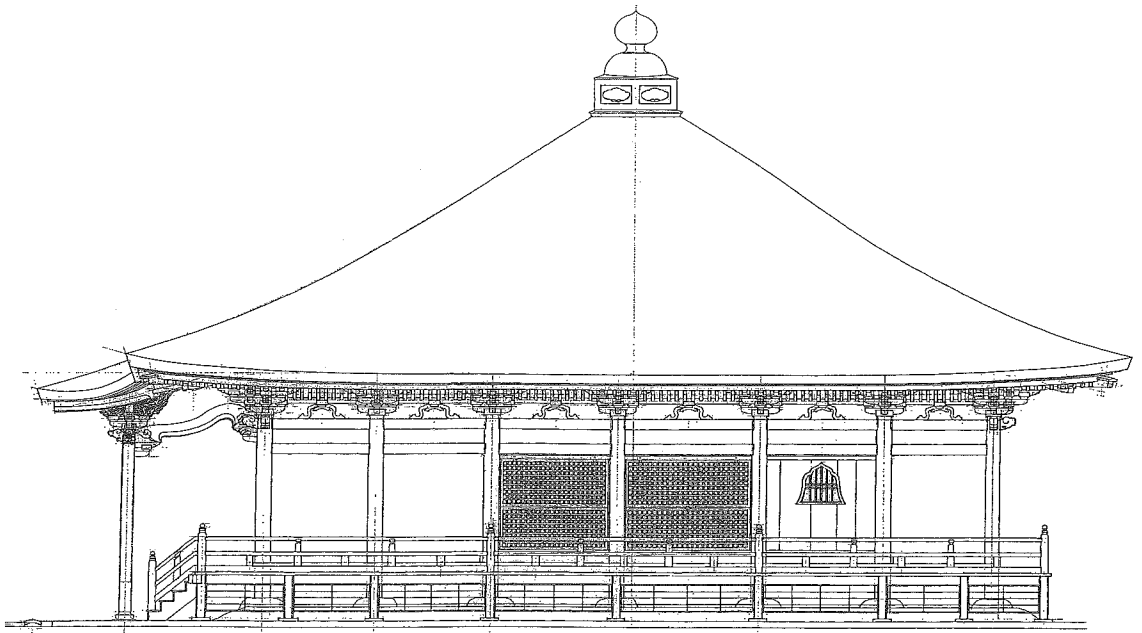
る。智恩寺では実物大の壁画復原を川面美術研究所に依頼しており、近く完成される。



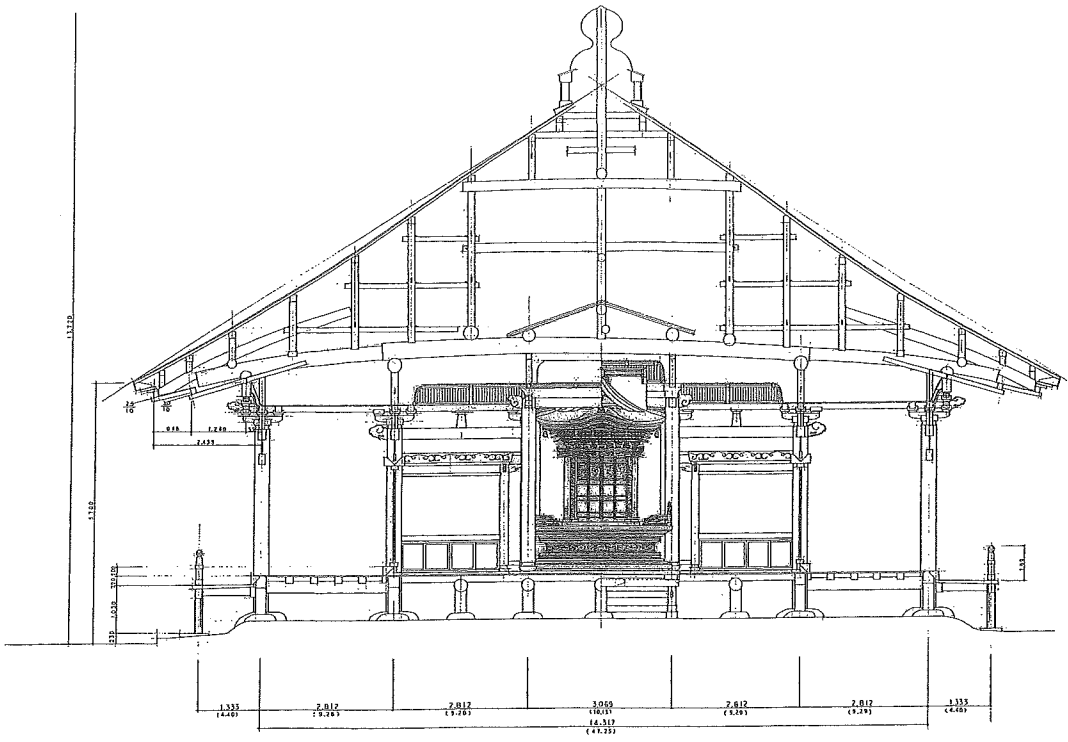
智恩寺文殊堂平面図



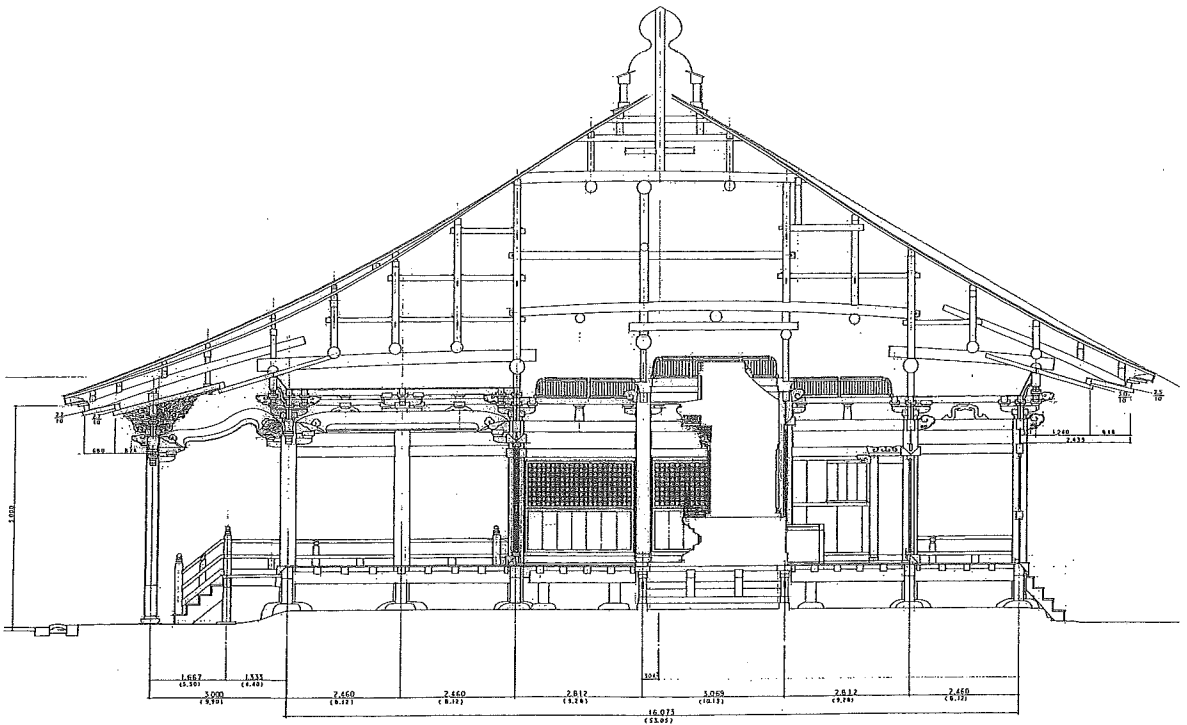
智恩寺文殊堂正面图



智恩寺文殊堂侧面图



智恩寺文殊堂桁行断面图



智恩寺文殊堂梁行断面图